

桜蔭俳話会 十一月句会 (第三五〇回)
平成二十八年十一月二十日(日)
会場・旭区民文化センター(サンハート)

死の覚悟つけぬままなり返り花 眞壽
鑑賞作者の本意は、死ぬことなんぞ恐れな
いということであるか。返り花の斡旋が効
いている。

断崖は「地獄のぞき」や石路の花 友子
鑑賞小旅行でも常に作句を忘れない作者の
目に断崖に綻ぶ石路の花がとまった。ただ、
地獄のぞきは、断崖にあるのが通例である
から、この句は、一歩づつ「地獄のぞき」や
石路の花、とすることができぬ。

木の実落つぎくりぎくりと老いを生く
直子
鑑賞擬態語の効いた句である。「老いを生
く」が前向きにとらえられる。

茶一本買ふ少年の咳払い 幸
鑑賞母親から頼まれたのであろう少年が咳
払いをしてお茶の葉を買う状況を俳句の題
材にしたのは、新鮮である。少年の咳払いは
軽妙である。

真白なる盲導犬や冬の駅 かおる
鑑賞故事来歴に依拠して、白と言えば秋と
いつているが、白は冬を形容するものとも
言える。白い盲導犬と冬の駅との対比が絶
妙である。

病棟の治験はじまる小春かな 明美
添削待たれたる治験はじまる小春かな

一人居の一人笑ひの帰り花 ツル子
添削一人居のひとり笑ひや帰り花

人見知りの子の来る日なり布団干す 友子
添削布団干す昼に来る子の人見知り

はらからの多かりし父母みかん熟る 朋子
添削はらからの多かりし父みかん山

仕切りなき田舎の庭のみだれ菊 幸
添削境界のあるかなき庭みだれ菊

風あれば音なし暮れて落葉みち ツル子
添削風あるも音なし日暮の落葉路

冬の港保護貿易の船荷積む 明美
添削埠頭冬関税高き荷積みかな

金色の海は束の間冬日落つ 友子
鑑賞「束の間」によって冬落暉の有り様が
よく形容されている。

黄落のゆふぐれ日比谷松本楼 朋子
鑑賞黄落の中に灯が入った松本楼を据えた
構図は、まさに一幅の絵である。

ヒスパニックあふれし冬の五番街 明美
鑑賞米国に題材をとったものであるが、近
未来を暗示する。異民族の奔流を言うなら
ば、「夏」の五番街でもよい。

三分の通過待ち北風通過

かおる

寄せ鍋や集いし子らに刻更けて

ツル子

添削通過待ち五分北風通過せり

添削寄せ鍋に弾む話や夜の更けし

秋深し変化求むやトランプ氏

直子

柿食ふや野菜不足に秋の雨

直子

添削秋深し変化求めし選挙民

添削柿赤し野菜不足の家計かな

単線の行く手日当たる枯野かな

友子

あばら屋に柿の実だけが色付ける 眞壽

添削日の当たる枯野単線伸びゆけり

添削あばら屋の屋根を越えたる柿の朱

旅に出で重なる紅葉晴れにけり

ツル子

白菜のひと葉残さぬ調理かな

かほる

添削紅葉晴れ重なる旅の宿りかな

添削…白菜のひと葉余さぬ台所

一茶忌の雨垂れに覚め六十五

朋子

十年のカフェに錠や冬ざるる

明美

添削一茶忌の雨垂れ齡六十五

添削…十年のカフェ閉ざせし冬夕焼

黄落やこぼれる光背に受けて

眞壽

婦人会会議雑談おでん鍋

かほる

添削黄落の真つ口中をただ一人

添削…婦人会半ばに囲むおでん鍋

迷ふなり鎌倉散歩秋の雨

直子

洞窟の川の連れ来る落葉かな

友子

添削手ごたへの鎌倉散歩秋時雨

添削…洞窟を貫く川に浮く落葉

熟睡児の掌より転がる木の実かな 幸

どしゃぶりのスーパームーンさざんくわ

添削よく眠る子の手の平の木の実かな

朋子

黄落の山道踏むや朴権恵か

直子

(文責 代表 増田 守)

添削黄落を踏む落日の権力者

(不在投句 古野明美、稲葉幸、荒木ツル子)

七五三我が娘飾れる写真館

眞壽

添削七五三吾子が主役の写真館

「お詫びと訂正」

赴任地へ越冬食や肉饅頭

幸

十月句会一覧の中で、一文字ぬけておりました。正しくは 次のとおりです。

添削肉饅を越冬食に新任地

秋の風ひらひらひと葉落ちもせず かお

る

「兼題について」

十二月句会より、兼題の一句を持参していただくことになりました。(合計五句)

十二月句会の兼題は、「息白し」です。

「事務局からお知らせ」

○十二月句会

十二月十八日(日)午後一時から、旭区民文化センター(サンハート)

○一月句会。

一月二十九日(日)に変更になりました。

会場・旭区民文化センター(サンハート)